

されば、カントのいつた「世界王國」汎愛主義者の教育の目的とした「世界公民」を文字通りに實現する時期は前途頗る遼遠であらうが、是等概念は決して之を空想を以て目すべきではないのである。

或學者は國家間には法律も道德もないと斷言する。勿論、今日、世界各國はそれ／＼一方に割據して居て、之を統轄する中心的權力はない。隨て國際的紛議を決する最後の手段は、兵力に訴へる外はないのであれば、國家内に行はれて居るやうな法律、個人間に行はれて居るやうな道德は、勿論、國家間には存在しない。然れども、國際的にも或意味に於ける法律、或意味に於ける道德の存することは又疑を容るべきでない。即ち、平和の場合にあつては郵便、電信等の規約の如き、赤十字同盟、國際仲裁々判等の權能の如き、通商貿易の條約の如き何れも世界的承認を経て、或度までの世界的權威を有して居る。又戦争の場合には戰時國際法があつて、若し之を遵奉せぬ國家があれば、世界各國の排斥を受け、或程度の制裁を免れることが出来ない。

又、締盟國間にあつては、吉凶ともに或は通信機關を以て、或は使者を遣はして、之を慶弔する事が一定の慣例である。斯の如きは明かに國家間にも亦或度迄の道德の存する明證である。人道なるものは、斯様な世界的事實を背景として存在し作用しつゝあるものであつて、世界に於ける一文化國民として之を認めるのは、該國民の避くべからざる道德である。

如何なる人民も、苟も國家を成して居る以上は、國家主義を執るといふことは當然のことである。國家主義とは國家の價値を認めて教育、政治、經濟、其他、國家一切のことをば、國家の存續發展といふ立場から打算する主義である。けれども、此主義は動もすれば極端に馳せて、國民が徒らに自國を重じ過ぎ、尊大となり、傲慢となり、終に國家の發展を妨げ、甚だしきに至りては國家の存在をすら危うするやうになるのである。隨て國家主義は勿論價値ある立場であるけれども、其弊害に至りては努めて之を避けねばならぬ。之が爲めには、自國の世界的關係を知り、自國の世界的位置を省みるべきで

ある。其處に世界主義と相容るゝ國家主義が起つて來るのである。

もと、世界主義とは、一方に個人の價値を認むると同時に、他方に世界のそれを認めて、人の行動を世界的立脚地より律する主義である。此主義は國家が餘りに跋扈して、之に屬する個人を眼中に置かず、個人の人格的價値を無視することになる所から、之を救ふ爲めに起つたのである。國家は其存立の必要上、政治、歴史、制度、法律等の諸點からして、之に屬する者即ち國民の行動を制限するものである。然れども、人民が若し此主義に囚へられ、始終己が國家内に没頭し、少しも世界の進運に留意せねば、其思想は偏狹となり、甚だしきは固陋となり、到底己が理想的發展を遂げることが出來ない。否、如何なる國民でも、其發展に必要な物質上並に精神上の資料を、總て自國に備へて居るといふものではない。今日、文化國といはれる國家は、衣食住の點に於いても、政治、教育、學術、文藝等の點に於いても或は道徳、宗教等の點に於いても、決して自國だけで足り且つ十分であるといふやうには往かない。

必ずや、其一を缺き、其二を缺き、其三を缺いて居る。否、假令之を缺かないにしても、其何れかは不完全であるを免かれない。そこで何なりそれ等の優秀なものを有する國家より輸入し、傳習して、以て自國の不足を補ふのである。それ故、如何なる國民も或度まで世界の價値を認めて、世界主義を執らねばならない。個人の發展でも、國家のそれでも、其資料は廣く之を世界的社會に仰がねばならないからである。其上、如上の國家主義の弊害を救ふ爲めには、此世界主義に依るを最も有效となすのである。此主義に依つて初めて、公明博大なる思想を養ひ、以て健全なる國家的生活を遂げることが出来るからである。是故に我々は脚は何處までも自國に立てて、而かも其發展の資料は廣くこれを世界に仰がねばならない。言換へれば、世界的國家主義を執らねばならない。我國は夙に此主義を執つて居る。例へば、彼の五箇條の御誓文中の「知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振興スヘシ」といふ箇條に依つて之を知ることが出来る。此箇條は畏くも明治天皇が維新の大

開國進取

業を成就し給ふに當りて、國家主義を本として、之を助くるに世界主義を以てし給うた御精神を餘蘊なく披瀝遊ばされたものであると恐察する次第である。即ち明治初頭の國是は開國進取であつたのであるが、是は取りも直さず、世界的國家主義の實行に外ならないのである。されば健全な國家主義は優に世界主義と相容れるのである。

世界主義の短所

世界主義の方からいうても同じ事である。此主義は平等主義であつて、例へば王者も人民も之を平等視するところから、其弊の生ずる所、十分に國家の秩序を維持することが出来ない。此主義の短所は此にある。又何人でも正確に世界といふ觀念を有つといふ譯に往かぬ。それが如何にも廣汎であるからである。又、今日世界の文化國は混一の勢を呈して居るが、是は何處迄も勢である。現實は隙も油斷もならぬことは現下の世界列強の態度を見て之を知ることが出来る。實力！是が今日、國民たる者の實際、世界に處する最後にして且つ唯一の據所である。そこで自ら國家主義の必

要が明瞭となつて来る。即ち世界主義も健全な國家主義を俟つて初めて其目的が遂げられるのである。隨て健全な世界主義は十分に國家主義と兩立するのである。

儒教
和魂漢才

我國に於て、世界的國家主義は初めて明治の初年に執られたものであるかといふにさうでない。我國は夙に此主義を實行して來て居る。我國が支那文化や印度文化を採用した態度は確かに此主義の下に於てした。我等の祖先は儒教に對して其過半は之を採用したのであるが、根本に於いては何處迄も自國を眼中に置いたことは、彼の和魂漢才といふ文字を見て之を知るべきである。されば禪讓放伐は國體上、斷じて取らなかつた。

佛教

次に佛教も我等の祖先は大に之を採用して、我れの文化の内容を深奥にしたのであるが、其厭世觀及び寂靜主義は凡べて之を學ばなかつた。加之、我國知名の佛家は、佛教が原形の儘では到底、之を我國に弘通することが出来ないことを看破して、神道と佛教とを連結して本地垂迹説を唱へ出した

ことは已に述べた通りである。斯様に我國が他國の道德や宗教を採用する點は、確かに世界主義の立場に立つたのであるが、何處までも之を取捨して、有益なものは取り、有害なものは捨てたといふことは、國家主義の立場を嚴守したものである。

基督教

終りに、西洋文化に對しても亦さうである。例へば、基督教は既に織田氏の時代から我國に入り、明治時代となりては、随分中外の宣教師が其布教に努力したに拘らず、左迄、振ふに及ばなかつたのである。そこで、一部の宣教師は之に日本的臭味を加味して、日本的基督教ともいはれるものを唱へ、現に高等教育を受けつゝある學生の赴く所は、此種の教を説く教會である。又泰西の政治には餘ほど、我國が倣ふ所があつたのであるが、其共和政體は斷じて取らないのである。

國民道德と
人道との調和

斯様に國家主義と世界主義とが十分に調和せられることを考へると、茲に我々は一つの重要な暗示に觸れる。國家を對象とする國民道德と人類

個人と國家
との十全な
發展

を對象とする人道と、其間に調和點が見出されはせぬかといふこと即ち是れである。國民道德は國民として當に行ふべき道德であるが、我々は自國以外に世界各國のあることを忘れてはならぬ。隨て、世界人類の道德即ち人道の存在を認めねばならぬ。人道を無視して國民道德を實行するが如きは、當然、世界各國の同情を失ひ、遂に自滅に向つて第一歩を踏み出す次第である。否、考へ方に依れば、今日苟も爲すある國民は、何うしても世界各國を眼中に置かねばならぬのであれば、人道の實行其事が聽て國民道德の實行であるとも言得るのである。隨て、是等兩種の道德は下の三點に於て十分に調和し得られるのである。

(一) 個人の發展も亦國家のそれも、苟も之を遺憾なきまでに進めるには、是非とも、世界的社會の力に俟たねばならない。若し我々の生活の全體が、國家といふ範圍内に局限せられてしまへば、個人の發展も國家のそれも十分に行はれない。兩者の發展をして遺憾なからしめる爲めには、之が資料

人道の保護
と國民道德
の實行

は必らず己が國境を越えて廣く之を世界に求めねばならぬ。其の之を爲すには、能く自國の世界的關係を知悉して、何處までも人道を尊重せねばならぬ。實に世界の文化國をして、互に相親んで世界的社會の組織を鞏固にし、眞の平和を招來せしめる最後の主動力は、人道を措いて他に存しない。由つて見れば、國民道德と人道とは個人竝に國家の十全な發展といふ概念の下に調和せられるのである。

(二) 人道の保護と發展とは、正義を重んずる國民の一致協同に依つて初めて期待せられるものである。元來、二若しくは二以上の國民が同盟や協約を結ぶのは如何なる理由に基くぞといふに、それ等國民が各々長所と短所とを有つて居つて、一方の長所は他方の短所を補ひ、他方の長所は亦一方の短所を補ひ、相合して始めて各々自國の安泰を圖ると同時に、貪慾飽くことを知らない國家の横暴を制することが出来るからである。それ故、人道の保護と發展とは、正義を重んずる國民の何處までも自國の特色を維持し、

相即不離の
關係

自國の長所を發揮する所に期待せられる。其の之を爲すには、第一、自國の國民道德を尊重せねばならない。各々特有の國民道德を實行して、此に初めて特色あり長所ある國民が互に手を取つて鞏固なる同盟を形造り、以て他の不正、不法の國家の主我的行動を抑へる所に、人道の保護と發展とが期待せられるのである。由つて見れば、國民道德の實行は、應て人道を保護する所以であつて、兩者は斷じて齟齬するものではない。人道の存在は之を國民道德の力に俟つ外はない。

(三) 總て物には二つの見方がある。一つは差別的のもので、一つは平等的のものである。言換へれば、現象論的のものと、本體論的のものとである。人類を差別的に現象論的に見れば、國民といふ者が看取せられる。然るに同一人類を平等的に本體論的に見れば、人類といふ種族が看取せられる。さて、差別と平等とは決して懸絶したものでなく、現象と本體とは相即したものである。差別は平等に對して差別であり、現象は本體に對して現象で

ある。之と等しく、平等は差別に對して平等であり、本體は現象に對して本體である。畢竟、差別即平等、現象即本體である。然らば差別的に現象論的に見た人類即ち國民は、是れ平等的に本體論的に見た人類即ち人類種族と相即不離のものであるといふべきである。此考へ方は、直に之を國民道德と人道とに適用することが出来る。若し道德なるものを差別的、現象論的の見方から見ると、其處に國民道德が現はれ來り、之を平等的、本體論的の見方から見ると、其處に人道が現はれて來る。即ち國民道德と人道とは亦相即不離のものであつて、兩者の間に何等の杆格を見ないのである。同一道德がその對象を異にする所から國民道德となり人道となるのである。即ち國家を對象として行はれる道德は國民道德であり、人類を對象として行はれる道德は人道であつて、兩者は同一道德の異つた方面に過ぎない。一言でいへば、國民道德即人道、人道即國民道德である。是故に、國民道德は國民に依つてその趣を一にせぬけれども、开が一國の存續發展を目的とする

國民道德即人道
國民道德即人道

教育勅語

點に於ては、如何なる國民にあつても毫も變りはない。畏くも教育に關する勅語の「克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」といふ御言葉は、是れ我國民道德の眼目を御示しになつたものと拜察せられる。然れども、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ」といふ御言葉に至りては、我國民道德は決して日本國民のみに效力を有するものではない、如何なる國民にも亦有效なるものである。我國民道德は一種の普汎性を有して居るものであるといふ御趣意と拜察せられる。由つて見れば、此御言葉は國民道德即人道といふ大乘的斷定を、餘蘊なく御示しになつて居るものと拜察せられるのである。

第十章 外來思想と國民道徳

第一節 思想の意義

思想の意義

外來思想の叙述に入る前に、思想そのものゝ如何なるものであるかを略説する。佛國の「群衆論」の著者ルボン氏は、歴史上記憶すべき事實は、人間思想の不可見的變化の可見的結果である」というて居るが、參考に値する見解である。何故ぞといふに、凡そ人間行爲の過半、否その殆ど凡てはこれが源を其思想に發するからである。思想は頭腦内に潜在する行爲であつて、行爲は外部に具現した思想である。然らばその思想とは果して如何なるものぞといふに、若し之を一般的にいふならば、开は思考の對象たる事物の觀念から成立つ知的系統である。我々は判斷、推理、概括等によつて一定の事物を事實として意識界に取入れる。是が該事物に關する思想である。そ

聯想

れは該事物の觀念とこれに關係する事物のそれとから成る系統である。思想は觀念系統である。

我々の認識する事物の觀念は唯、雜然と頭腦内に積まれるのではなくて、一定の心理學的法則によつて排列せられる。心理學上之を聯想律と呼び、この事實を觀念聯合といふのである。觀念聯合には種々の場合がある。同時聯合、接近聯合、因果聯合等即ち是れである。同時に起つた事實の觀念は時を異にして起つた事實のそれよりも速に結合する。これを同時聯合といふのである。接近した場所の觀念は隔つた場所のそれよりも速に結合する。これを接近聯合といふのである。又因果的關係のある事實の觀念は該關係なき事實のそれよりも速に結合する。これを因果聯合といふのである。是故に一定の事物に關する思想は、唯これに關する觀念の雜然たる群ではなくて、一々この聯想律に支配せられて結合する觀念の系統である。されば、思想はこれを數多の觀念から成立つ知的系統といふことが

同時聯合
接近聯合
因果聯合

出来る。思想は我々の知性の産物である。否、知性の鍛錬せられて成る理知の産物である。随て苟くも理知の健全である限り、人は何等かの思想を有する筈である。

是故に思想は我々の思考の對象たる事物の觀念を論理的に取扱ふところに成立つものであつて、人の知的生活に取つて中心實在たるものである。否、思想の創作とこれが享受とが、聽て人の知的生活の全體である。されば思想は知的生活をなす者に取つては、第一義的のものであつて、何物を以てするも之に代ふることは出来ない。随て思想は之を有する者の覺醒の姿相である。自覺の状態である。若し茲に思想の極めて暗昧な者があれば、彼は少くとも知的には嗜眠状態にあるものといふべきである。或は又思想は之を知的自我と見ること出来る。知的方面から捉へた自我が即ち思想であるからである。是故に思想は原始人は措いて問はず、苟くも文化人たる者の自我であるといはれる。

凡そ思想には危険なるものなしと言切つて居る者がある。成程、一の考へ方によれば、思想は危険とか、安全とかいふべきでないかも知れぬ。何となれば、思想は是れ到頭、我々の頭脳内の事實であるからである。然れども、之を他の考へ方からするとさうでない。人の行爲は少くとも夫が意志的に成遂げられる以上、一としてその源を思想に有せぬものはない。思想は内的行爲であつて、行爲は外的思想である。王陽明とソークラテースとは、何れも思想と行爲との間に存する親密な關係を洞見してゐる。斯様な考へ方からすれば、危険行爲の源は危険思想であつて、危険思想の存在することとは少しも疑はれぬ。危険行爲は危険思想を豫想する。今若し危険思想を限定すれば、それは國體、國史、國民性、社會組織、經濟組織等と相容れぬ思想といふべきである。既に思想に危険なるものがあるとすれば、これが取扱ひ方に就て、一わたり方の注意を要することは改めていふまでもない。

危険思想の取扱ひ方の一は行政上の處分である。これは今日、世界の文

化國に於て一般に行はれるところである。蓋し我々人類が國家といふ生活様式を必然的に必要とする以上、この國家生活を傷けようとする思想の所有者には、之に行政上の處分を加へるのは當然の事に屬する。然らば、我は危険思想の所有者に對して單に行政上の處分を加へれば、それで足り且つ十分であるかといふに決してさうでない。何故ぞといふに、凡そ行政上の處分の加へらるゝものは、僅かに思想の具體化した部分に限られるのであつて、思想の思想たるどころ即ち觀念系統そのものは、依然として我々の頭腦内に存するからである。更に之をいへば、法律の捕捉し得るものは、危険思想の外的表現に過ぎぬのである。即ちそれに關する論文、著書、講演、宣傳ビラ、書狀、直接行動等であつて、是等諸事項の源頭たる觀念系統そのものには、到底觸れ得ないのである。是れ法律は其成文律たると不文律たるを問はず、その性質上、極めて機械的、形式的のものであるからである。是に於て危険思想に就いて第二の取扱ひ方が必要となるのである。

それは健全なる思想を以て之を矯正し、之を指導し、之を克服し、之を緩和し、久しきを経て之を拂拭し去る事である。思想に對するには宜しく思想を以てすべきである。蓋し思想の牙城に攻入ることの出来るものは、之と其の類を同じうする思想を除いては、他に何物も存しないからである。是に於て思想を取扱ふ者は、己れ先づ思想の何たるかを知らねばならぬ。所謂思想善導の任務を有する程の者は、宜しく先づ思想に關して徹底した理解がなければならぬ。善導の對手が其胸裡に果して如何なる思想を藏するかを知らねば、效は決して勞に副はぬであらう。思想の何たるかを解せず、對手の思想状態を知らないで、その思想を善導するといふ事は明かに不可能の事である。

元來、生存競争なるものは、主として生物界に存する事實であるが、之に酷似する事實が思想界にも亦存するのである。思想界に於て競争上、優勝者たる思想は深くその根ざしを人性の奥底に有するものである。之に反し

聖哲の教説

て、危険思想は、之が反對の思想であつて、如何に其結構が巧妙であつても、早晩思想界の劣敗者となるのである。固より危険思想とても起るべくして起るものであれば、相當の根據を有し、隨て時としてはこれが共鳴者を見出すのであるが、开は斷じてその根ざしを人性の奥底に有し、的確に人生の眞に觸れて居るものでない。爲めに何時しか健全なる思想の矯正し、克服するところとなるのである。孔子、釋迦、基督、カント等、聖哲の我々に遺した教説は、何れもその根ざしを人性の奥底に有するものであつて、其の中には其光りを日星と争ひ、其久しさを河嶽と競ふものがあるのである。其教説が今日尙ほ生命を有して人心を支配しつゝある事そのことが、已に之が明證である。我々は深く是等教説に沈潜して、何處迄も己が健全思想に培ふところあるべきである。

第二節 世界思潮

世界思潮

米國の參戰

1 デモクラシ

世界思潮とは世界大戰の中後に於てその形を備へて、殆ど世界の凡ての文化國民の思想と行爲とを支配するやうになつた思想の潮流である。この世界思潮の構成は、米國の大戰參加を以てその緒を開いたのである。一九一七年四月二日、時の同國大統領ウイルソン氏は、議會に臨み參戰の理由を述べた演説の中に、世界はデモクラシーの爲に安全にせられねばならぬ。その平和は政治的自由の試練せられた基礎の上に打建てられねばならぬ」といふ言葉があつた。氏の頭腦には、大戰の首謀國獨逸と、之が同盟國奧太利とは、オートクラシーの國即ち專制國と映じたものゝ如くである。オートクラシーの國とは、一人の君主若くは少數の權力家が、己の意志を以て一切の國事を斷ずる國家の謂である。これに反して、デモクラシーの國は、一般民衆の利福、安寧といふ點から萬事を打算する國家である。而して彼の大戰の勝敗は如何にといふに、英佛米の三國を中堅とする聯合國側が勝利を得て、獨逸二國より成る同盟國側は敗北した。前者の干戈の上の勝利は

戦争の勝敗
は思想の勝敗

國民道徳綱要

二〇八

その儘でデモクラシーの勝利となり、後者の干戈の上の敗北は亦其儘でオートクラシーの敗北となつた。戦争の勝敗はその儘で思想の勝敗となつた。斯様にしてデモクラシーは世界思潮の主なる部分を形造くるやうになつたのである。

過激主義

世界思潮の第二の要素は過激主義である。此主義の由来を案するに、露國の政治は昔から嚴しい意味で専制政治であつた。同國の専制政治の大なる缺點の一は、社會の上層は夙に歐洲文化の恩恵に浴しながら、その下層に對しては故らに教育を怠り、専制を施すに便にしたことである。然れども、如何程無學文盲の輩といへども、善政と惡政との區別は附く。爲めにロマノフ朝の専制治下の人民は自づと反皇室、反政府の思想を懐くやうになつたのである。この種の反抗は果然、一八八一年三月アレキサンダー二世の暗殺となつて爆發した。アレキサンダー二世は帝政露國最後の君主ニコラス帝の祖父に當る方である。この事件は五人の徒黨に依つて企てら

君主暗殺

レニンの兄

れたものであるが、中に一人の女子が居つた。以て當時如何に人民の専制呪咀が、その頂點に達したかを察すべきである。この事件の嫌疑者の一人にニコライ・レニンの兄があつた。彼は暗殺事件の嫌疑を受けて禁錮せられ、遂に獄死した。レニンが後年、辛辣極まる反皇室の態度を取つて、勞農革命の中心人物となる一理由は、此邊に存しはせぬかと思はれる。

プレフアノ

この事件あつて以來、少くとも露國の前途を念とする程の者は、果して如何にすれば祖國を救ふ事が出来るかといふ事で、その腦漿を絞つたのである。當時、インテリゲンティヤ即ち有識者の一人にプレフアノといふものがあつた。彼は經濟學と社會學とに造詣が深く、熟く祖國救済の方法を考へたのであるが、皇室を始め、貴族、富豪から成る社會の上層は永く民の怨府となつて居るところから、到底這個の大任に當る譯には行かぬ。中層はその人數からいうても少く、その力からいうても極めて微弱であつて、同じく國家の救済に當れぬ。残るところは單り下層である。ところがこの下

社會民主勞
働黨

層の殆ど凡てが、眼一丁字なき者である。爲に彼は先づこの下層を産業的に覺醒させようとして、労働組合を組織し、次にこの組合を通して彼等を政治的に覺醒させようとして、一八九八年、社會民主労働黨と呼ぶ政黨を組織した。この計畫が天下に發表せられるや、露國のインテリゲンチヤの内には心から之を喜ぶものがあつた。苟くも祖國の將來を憂ふる程の者は、何れも何うにかして國家を救はうと、日夜苦慮して居つたからである。そこで都會、田舎を問はず、彼の麾下に駈け參する者が少くなかつた。プレフアノフの麾下に走つた者の中にレニンその人があつた。實に彼はもとプレフアノフの部下の一人であつたのであるが、一九〇六年、第三回社會民主労働黨大會を瑞典の首都ストックホルムで開いた時、意見の相違の爲に終にプレフアノフと袂を分つことを余儀なくせられた。社會民主労働黨が次第にその勢力を得るに隨つて、これを統一する機關として中央委員會といふを組織する事になつたが、その權限に就いて議論が二つに分れた。

レニン

ボルシエ
イズム

温和派は實權は何處までも労働組合に與へて、中央委員會には單にこれを統一するだけの權能を與へれば足りるとなした。然るに急進派はさうでない。宜しく中央委員會に絶對權を與へて、之を急先鋒として、直さま、露國の支配階級に向つて階級戰を宣すべきであると主張した。そこで終に決を投票に問うたところ、急進派が多數を占めて勝利を得た。露西亞語でこの多數派をボルシエヴァイキイといつた。又ボルシエヴァイツクともいつた。前者は複數で後者は單數である。過激主義は原語でボルシエヴァイズムといふが、これはボルシエヴァイキイ若くはボルシエヴァイツクから導かれたのである。是故にボルシエヴァイズムといふ言葉は、文字的には多數主義といふ意味のものである。これより以後、急進派即ち過激派は温和派を全然その行き方を異にして、窃かに時節の到來を待つたのである。越えて八年、一九一四年となり世界大戰が勃發し、露國は聯合國側に屬して、獨逸に向つて戰を宣した。初めの程は露國が勝利を得たが、其後次第に

1 クレ
レン
スキ

形勢が不利となつて頻りに敗れた。當時露國の首相はケレンスキーであつた。彼は意志の人ではなく、政界の溫和派に向つては好意を表し、過激派に向つても歡心を買つて屢々失敗を演じた。野にあつて虎視耽々、窺かに時節の到來を待つて居つたレニンは、時は來たと手を拍つて喜んで、政界の表面に躍り出て、ケレンスキー内閣に向つて種々の難題を持ち懸けた。その主なる一に戦争の即時中止といふがある。レニンに従へば、今次の大戦は歐洲に於ける帝國主義的國家の間の爭覇戦に外ならぬのであつて、何れが勝つても露國の無産者には毛頭、利益がない。是故に速にこの對外戦を轉回して對内戦とせなければならぬといふのである。此に對内戦とは有産者に對して無産者の挑む階級戦である。如何に連戦連敗の爲めに鼎の輕重を問はれたケレンスキーと雖も、この提議を肯諾する事は出來ぬ。レニンの攻撃は如何にも急である。爲めにケレンスキーは進退維れ谷つて、遂に無責任にも巴里指して出奔した。己が國家の危急存亡の秋、一國の首

相が難局の一切を抛つて他國に遁れ去るとは、何たる遺憾事であらう。ここで帝政露國はその覆滅に向つて大股な歩みを運んだ譯である。首相を失つた内閣は、言葉通り頭腦を失つた身體であつたから、彼れレニンはサヴエート即ち勞農會を後援として忽ち政權を握り、その同志トロツキを勞農會議長に任じ、互に相呼應して年來の志を實際に施すこととなつた。年來の志とは他でない。カール・マルクスの革命的共産主義の實行である。レニンも亦トロツキも國事犯者として諸國に浪々の身たる間に、専心、マルクス主義を研究したものゝやうである。レニンは、余はマルクスの弟子であるといつて居る。即ち彼等は革命を方法として帝政露國を覆へし、其跡に共産政治を布いたのである。そこで國內的には皇室を倒し、貴族、富豪、軍人、僧侶その他の有産階級を或は殺し或は放つて、その動産、不動産を國家の所有となし、國外的には先づ聯合國との約束を無みして獨逸と單獨媾和を決行し、聯合國をして呆然、自失せしめ、次に國債破棄を斷行して再びその

債權國を驚倒せしめた。斯くて露國に無産者の獨裁政治が實現されたのである。その勞農露國の大體の輪廓が出來上るや、政府の首腦者達は勞農露國永續の方法に就いて深く考ふるところがあつた。その結果、露國をして無産者政治の下に立たしめたものは革命であれば、この方法を世界各國に適用して、夫等諸國にも亦無産者政治を實現しようとした。いはゆる國際革命政策なるものが即ち是である。言換へれば、世界の赤化である。思ふにこれに勝る世界的脅威は他に無いであらう。是に於て勞農政府は世界各國をして三たび驚倒させた。この政策は今尙、同國第三インターナショナルの固執するところに繋り、諸國に共產黨事件を惹起しつゝある。この計畫たる、初めに獨逸の國體を變更させ、次に歐洲大陸の諸中立國に及び、進んで英佛二國に向つてこれを試み、更に又米國に及ぼし、東洋に向つては波斯、アフガニスタン、印度、支那、朝鮮、日本等の順序で試みつゝあるものゝ如くである。この邊の知識を念頭に置いて、前後三回我國に起つた共產黨事

國際革命政策

マルクス主義

サボタージュとストライキ

件を考察して見ると思ひ當る節がないではない。由つて見れば、過激主義も矢張り世界思潮の一の要素であるといふべきである。

世界思潮の第三の要素はマルクス主義である。去る世界大戰は勞働に對して新なる社會的價值と大なる世界的意義とを與へた。彼の大戰たる如何にも大規模のものであつて、先づ戰場に於て種々の器具、機械に關する知識、技術を有する勞働者出身の兵士がその肩身を廣くした。國にあつて兵器、彈藥その他の軍需品を製造しつゝある勞働者も亦同様である。即ちその戰場にあると工場にあるとを問はず、一般に勞働者の社會的位置は急に高まつて來た。爲めに彼等は漸く得意となり、その或者は無責任なるまでに跋扈し、遂にサボタージュやストライキを執行するやうになつたのである。勞働者の這個の態度に裏書した思想が即ちマルクス主義である。もと、マルクスは極力勞働者に味方して、資本家に敵對した經濟學者であつて、世界の勞働者を握手せしめて世界の資本家に當らしめ、世界の勞働者の

社會主義

解放を企てたのである。マルクス主義の大なる目的の一は、労働者をして資本家の手から産業管理權を奪つて、これを己れの手に收めしめるところにある。斯やうに考へれば、マルクス主義も亦世界思潮の重要な要素たる事が分るのである。

最後に世界思潮の第四の要素として、社會主義について一言しよう。若し社會主義を廣義に解すれば、上述の過激主義でも、またマルクス主義でも、皆その中に含まれるのであるけれども、若しこれを狹義に解すれば、過激主義やマルクス主義と區別せられる社會主義が考へられる。歐米諸國にも亦我國にも事實過激主義ならぬ社會主義、マルクス主義ならぬ社會主義の運動が存することを思ふべきである。爲めに私は便宜、狹義の社會主義を以て世界思潮の一要素となさうと思ふ。即ちそれは、絶對自由と絶對平等とをその標語となして、社會の階級を打破し、特權を撤廢して、無階級、無特權の社會を作り出し、これこそ我々の生き甲斐のある社會であるとなすも

のである。この主義を奉ずる者は、大戦中、歐洲諸國中にも英伊兩國の労働運動に喩を容れて、労働問題の解決は、是非共、社會主義に俟たねばならぬやうな態度を取つた。最近我國で頻りに起る労働争議や小作争議の中には、いはゆる主義者の關係するものがあつて、彼等は往々にして別に問題を持たぬ同胞に向つて強ひて問題を授けて、徒に事端を紛糾させるのである。彼等は是等の争議を機會として、窃かに自ら利しつゝあるのである。

嚴密にいへば、世界思潮の構成要素は、他にもあらうが、以上述べたデモクラシー、過激主義、マルクス主義及び社會主義(狹義の)の四を以てその主なるものとする。

本節を終るに臨んで、所謂思想問題の起る経緯を一瞥したい。世界思潮は種々の傾向を有する。その一は平等化の傾向である。これは、是まで社會に存した階級或は特權を除去つて、人の生活を平等一如のものとしよふとするものである。その二は少數の國家的並に社會的優者を抑へて、一般

思想問題
世界思潮の
傾向
平等化

民衆化

民衆をして彼等に代らしめようとするものであつて、名づけて民衆化の傾向と呼ぶべきものである。蓋し今日ほど、無名の民衆が社會種々の方面にその勢力を振ふ場合は未だ曾てなかつたやうに思はれる。かくして彼等は、是まで知名の少數者の握つてゐた權力を奪つて、これを自らの手に收めようとして居るのである。その三は労働なるものが殆ど凡ての文明國に偏重せられて、一時は人をして世界は労働者の所有に歸しはせぬかと思はしめた程である。名づけて労働化の傾向といふべきである。現にこの傾向の國家的に活躍したものは、これを勞農露國に於て見ることが出来る。勞農露國こそは國家の労働化せられた恰好な事例である。その四は國家の意外に輕んぜられて、兎もすれば、國境を撤し去つて、世界の政治的區劃を無くし、若し世界の人類を區別する必要があるならば、これまでの如く、人種や文化をその標的となさないで、職業をその標的となさうとする傾向である。名づけて世界化の傾向といふべきである。この傾向は獨り思想の上

労働化

労働化

世界化

満洲の労働化
労働化の傾向
世界化の傾向

國際化

ばかりでなく、又風俗の上にも看取されるところである。その五は一の國家と他の國家との問題は、それ等關係國間のみで處理しないで、各國から代表者を出し、一堂に會せしめてこれを解決しようとするものである。換言すれば、國際問題は文字通り國際的に解決して、何處までも列國共存の原則を實現しようとするのである。名づけて國際化の傾向といふべきである。特に労働、學術、軍事等の諸點で、大戰後、頻りに國際會議の歐米諸國に開かれて、我國からも代表者の臨席したことは、人の能く知るところである。細に考へれば、他にもまだあらうけれども、少くとも世界思潮には上の五種の傾向が判然と見られるのであつて、是が我同胞國民に對して種々の影響を與へた。例へば平等化の傾向は我々の社會生活の上に力強く働いて居る。思ふにこれが極端な場合は彼の水平運動であらう。また民衆化の傾向が特に我れの政治に影響しつゝある事は、我國で輿論が日に／＼その力を増しつゝある事によつて之を想察することが出来る。労働化の傾向

の我國に存することは復た繰返す必要はない。世界化の傾向、國際化の傾向、亦何れも然りである。即ち我々は世界思潮の傾向の影響の爲めに安んじてこれまで通りの家族生活、國家生活をなすことが出来なくなつた。此に少くとも我國の指導階級、有識階級の念頭に存する不安、焦燥の理由が潜んで居る。如何にしてこの不安、焦燥の念を取除くべきか。如何にして世界思潮と我れの在來の社會生活、國家生活を調和すべきか。是が所謂思想問題といふ名稱を以て言表さるゝ複雑な問題である。思ふに世界創開この方、思想なるものが斯くばかり人類の實生活に緊密な關係を有つた事はなかつたであらう。

第三節 デモクラシー

デモクラシーなるものは學說でもなく、徳教でもなく、また宗教でもない。そのうへ、人により處により、必ずしもこれが概念を一にせぬ。否、單りデモ

デモクラシーの難解なる理由

クラシーに對する見解が一致せぬばかりでなく、デモクラシーそのものが未成品であるとなす學者すらある程である。英佛米の三國は何れも、デモクラシーの國家であるけれども、是等三國のデモクラシーは必ずしもその趣を一にせぬ。英國のデモクラシーは君主的デモクラシーといふべく、佛國のそれは共和的デモクラシー、而して米國のそれは民主的デモクラシーといふべきである。

蓋しデモクラシーの眞意義を捉へようと思へば、諸權威のこれに下した定義を知るを捷徑とする。市俄古大學教授タフツ氏は「デモクラシーの根本觀念は、何人もその己れの有するところのものを表はす機會を得ねばならぬ事である。」(我等の「デモクラシー」二七九頁)というて居る。これは機會均等といふ點からデモクラシーを提げたるものである。佛國の政治學者モンテスキューは「人民の團體が最上權を有する時、是はデモクラシーと呼ぶる。」(法の精神第一卷八頁)といつて居る。これは政治的デモクラシーをい

デモクラシーの定義
タフツ教授

モンテスキュー

デューイ教授

うたものである。コロムビア大學教授デューイ氏は「デモクラシーは政治の様式以上である。開は第一に結合した生活の方法である、聯結し且つ交通ある經驗の方法である」「デモクラシーと教育」一〇一頁)というて居る。これは専ら共同生活といふ點からデモクラシーを限定したものである。ロックフォード・カレージ總長ガリヴァー氏は「生き、呼吸し、脈搏つところの共同生命が自己表現を各部分に於て見出すが如く、各部分が全體の生命に於て自己表現を見出すをデモクラシーといふ」「デモクラシー研究」七八頁)というて居る。これは哲學的にデモクラシーを定義するものといふべきである。何故かならば、全體と部分との關係から普汎的にデモクラシーを捕捉して居るからである。たとひ、學者ではないが、デモクラシーの意義を説く者として、特に米國民の誇るところのものは、同國名大統領の一人リンカーンの「人民の爲に、人民に依る、人民の政治は地上から滅びぬであらう」「ゲッテスブルグ演説」といふ言葉である。これまた政治的デモクラシーをいふ

ガリヴァー
總長

卑見

ものである。

私はデモクラシーを自由と平等とを以て人類生得の權利となし、全體意志の力を以てこれを人生のあらゆる方面に實現しようとする精神及び努力である。といはうと思ふ。敢てこれを以て上述諸賢の説に代へようとするのではない。唯、成るべくデモクラシーの諸相を包括しようと思ふのみである。

デモクラシー
の種々相

デモクラシーの最初の形は政治的のものであつて、既に之を古代のギリシアに於て見られる。當時、民衆は社會上層の支配階級からその權力を奪つて、これを己が手に收めた。然るに近世となり、それが擴大せられて、政治の方面は論なく、社會の方面にも、産業の方面にも、教育、藝術の方面にも及んで、此にデモクラシーの種々相を現するやうになつた。斯くして一般民衆はその生活のあらゆる方面に於て、在來の諸々の制限、束縛から解放せられて、自ら己が生を創作し、自らこれを享受し、共存、協同の態度の下に最善の生

を分取しようとし、爲めにデモクラシーは、一般民衆の實生活に堅くその根柢を有することとなつたのである。

デモクラシーは民衆の生活その本位となし、民衆の意志その根柢となして、初めて想到し得る所の概念である。夫は民衆が依つて以て全體として、己が生身の安全を熱求する一個渾然たる精神であり、又この精神を實現しようとする熱烈なる努力である。更にこれをいへば、全體人民に立脚し、民衆意志に出發して、人類の共同生活に堅き根柢を與へるものである。その國家生活たると、社會生活たると、將た又、他餘の團體生活たるとを問はず、人をして自覺的に自發的にその共同生活を遂行させるところのものである。

全體意志

この點からこれをいへば、デモクラシーは人の共同生活をなす上に、全體意志の上位を認める態度といふべきである。こゝに全體意志とは、その住所を社會、國家その他の團體を組立つる個人の心に有し、而かもその個人の

デモクラシーの徳目

有する個人意志を超越して、全體を以てその目的となすものである。もと、個人意志は個人を以てその目的となし、努めて自己主張に出づるものであるが、個人の集團が秩序並に統一の情操によつて結付けられて、以上の諸生活様式を組立つれば、不知不識の間に個人の利害を離れて、全體を目的とする意志を生ずるのである。これが即ち全體意志である。如上の諸生活様式に生命があり力があつて、これに屬するものを統一し、以てその生存を可能ならしめるのは、一にこの全體意志の存するが爲めである。個人が己が利害に動かされないうで、よく以上の諸生活様式を本位として行動するは、これ彼がその個人意志を抑へて、その全體意志に従ふからである。

デモクラシーは人の自由と平等とを認め、其性情の多趣、多様な發展を重んずる。隨て人の自主的活動と多方面の關心とを許して、無意味の制限はこれを加へる事を戒める。爲めに人は其生活の場面を擴大し、己が人格の凡ての側面を社會、國家に暴露して、望ましい刺激を受入れ、其有する諸

の可能性を發展させる。己が思想、感情は他人のそれ等に影響し、他人の見解、判断は己がそれ等に關係し、人は内的にも外的にも互に交通して其經驗を交換し、其理想を表示して、生活の機會は均等となり、對社會の關心は同様となる。其結果、人は暢達の氣象を養ひ、事に當りて全幅の自我を發露し、率直、宏量、眞摯、責任重視等はデモクラシーの倫理の重なる徳目である。

デモクラシーの長所

デモクラシーの長所の一つは人物の尊重である。デモクラシーの國家にあつては、主權者が普通選舉に依つて一般民衆から選出せられる場合にも、また社會の指導者を選択する場合にも、富よりも門閥よりも人物を以て最も重要な標的となすのである。其二是自治の尊重である。政治的デモクラシーの根本義は、主權が人民に存するといふこと即ち人民が主權者であるといふことである。詮じ詰めれば、治者と被治者とが自づと一致し來るのである。被治者即治者である。これを自治の眞意義とする。法律に向つてもまた同様の觀察が下される。押詰めれば、法律に依つて治められ

公共心の尊重

デモクラシーの短所
多數の横暴

る者は法律を立てる者である。遵法者即立法者である。これまた自治の第二の意義である。デモクラシーの基礎的觀念の一はこの自治である。リンカーンの「人民に依る人民の政治」とは畢竟この自治を指すに外ならぬ。その三は公共心の尊重である。これ等の長所はこれを我が國民道徳の立場から見て相當參酌に値ひするものである。

デモクラシーの短所中の短所は多數の横暴である。デモクラシーの國家の大統領は、己れが大統領の印綬を佩びることの出來たのは一に人民の爲めであるとなし、又代議士は己れが代議士の椅子に就くことの出來たのは同じく全く人民の爲めであるとなすのである。斯くて人民の意志が大統領や代議士の重視するところとなり、隨て輿論が絶大の勢力を有するやうになるのである。この輿論を抜きにしては、政治もまた社會經營も、到底これを遂行することが出來ぬ。デモクラシーの國家や社會に於て、多數の優越といふことが成立つのはこれが爲めである。この輿論にして聰明な

指導者によつて導かるゝ間は、元より憂ふべきものを見ぬのであるが、一度それが腐敗し、墮落して、輿論ならぬ輿論が跋扈するやうになれば、そこに多數が少數を壓して、多數の横暴が成立つのである。

第四節 社會主義

第二節に述べた世界思潮の要素の順序からいへば、本節に於ては過激主義を取扱ふべきであるが、前後の關係からすれば、社會主義を論述する事を便とする。社會主義特にその近世に於けるものは、政治の方面では政治革命を父となし、産業の方面では産業革命を母となして、その間に生れた思想上の兒子である。こゝに政治革命とは佛國革命を指すのである。この革命は若しこれを思想上から見れば、自由、平等及び同胞の三觀念の、革命による政治上の實現に外ならぬのである。この革命以來、自由、平等の二觀念が歐洲の人心にいかばかり根ざし深く刻み込まれたか知れない。この二觀

社會主義の
父母

佛國革命

産業革命

念はその儘で社會改造の主張即ち社會主義の動機となつたのである。

産業革命は英國に於ては十八世紀末、歐洲大陸では十九世紀初に於て起つた事實である。歐洲の中世に於ては貨物は人の手先によつて造られたところから手工業と呼ばれ、労働は家内で行はれたから家内労働と言はれた。然るに、一七六三年、英國のワットが蒸汽機關を發明し、一七六六年同國のハーグレイヴスが紡績機械を發明してから、工業用の機械がつぎつぎに發明せられ、それが産業に適用せられた爲めに、手工業は變じて機械工業となり、家内労働は減じて工場労働が起つた。これが必然の結果は貨物の激増となり、それを汽車、汽船に載せて、廣く外國に賣捌いたから、富の回收が激増した。この激増した富を懐にした者を資本家と呼ぶのである。然るに、この資本家に向つて、賃銀といふ代金を以て労働といふ商品を賣る専門の階級を生じた。これを労働者とする。この資本家と労働者とは多くの場合、合に於て、その利害が相反する。前者は成るべく労働時間を増し、成るべく

資本家

労働者

賃銀を減じようとするが、後者はこれが反對に、成るべく労働時間を短くし、賃銀を多くしようとする。爲めに是等兩階級は漸く相對立し、終にその間に闘争を開始するやうになつた。前の事實を階級對立と呼び、後の事實を階級闘争と呼ぶのである。機械工業が起つてから階級闘争を見るまでの事實を産業革命といふのである。

社會問題の
續發
勞資問題
人口問題

機械工業の勃興は、數多の新しき社會問題を生じた。その第一は上述の階級闘争に即する勞資問題である。如何にして勞資兩者を協調さすべきかは、殆んど凡ての工業國に見られる問題であつて、現に我國も亦これが例外たらぬのである。これ我國にも亦或る程度の産業革命が起つたからである。第二は人口問題である。一たび機械工業が盛んとなるや、これまで農村に於て農業に従事してゐた少壯男女は、鎌や鋤を抛つて工業都市に集つた。その結果、工業都市の人口は激増した。この人口を如何に處理すべきかといふことが人口問題であつた。第三、工業は主として工場といふ制

風紀問題
労働者児童
保育問題

農村問題

政府の責任

限された場所に於て、労働者が織物、金屬、木材の如き生命なき物を取扱ふものである。隨て工業はこれを農業に比ぶれば、單調で、無趣味で、而してまた不健全であつて、これに従事する者は疲労し易い。爲めに工業都市には娛樂機關を必要とする。娛樂機關に隣りして、誘惑機關の生ずるのは自然の理である。その結果、工業都市を中心として、一體に社會の風紀が亂れて、此に風紀問題が起つた。また労働者が相當の所得を得て家庭をつくり子女を擧げるや、父母は多くは工場に出入する爲めに、十分に子女を保護、教育することが出來ぬ。斯くして第四、労働者児童保育問題が起つて來た。又少壯男女の都會に去りたる後、田舎に農村疲弊といふことが現はれて農村問題が起つた。

かやうに機械工業の勃興に連れて、新問題が陸續と生じた。これが解決を圖る當面の責任者は政府であるが、當時の政府は多くはこの任務を全うする準備を有しなかつた。例へば、速に工場法を設けて、企業家の労働者に

對する行動を監督することの如き、利益分配の方法を確立して、それを公正にするこの如き、不熟練工及び幼年工の教養を圖ることの如き、何れも政府に取つて避くまじき急務であつた。然れども、政府はこれを果さなかつた結果、労働者は益々悲惨な境遇に陥つた。之を見て且つ嘆き且つ憤り、如何にしてかこれを救済しようとして起つたものが社會主義者である。

社會主義の主張によるに、眼前の産業組織は勿論、社會組織そのものも亦資本主義的のものである。隨てそれ等は資本家・企業家には頗る有利であるが、労働者には全く不利である。この故に先づ資本制度を廢し、これに係ある政治組織並に宗教制度を撤去すべきである。斯くしても尙ほ産業界の危機を救ふことが出來ぬとあれば、從來の産業組織、社會組織を改造して新たに労働者の支配する産業組織、社會組織たらしむべきである。これが爲めには社會に存する諸々の階級を打破し、諸々の特權を撤廢し、一般民衆の絶對自由と絶對平等とを現實にせねばならぬ。もと、人は自由に生れ、

社會主義の主張

平等に生れたものであるが、階級の存し特權の存する社會に在つては、それ等は蹂躪せられ終るのである。社會は無階級、無特權にして、初めて人は自由と平等とを樂んで生き甲斐ある生を遂げることが出来るのであるといふのである。

この主義の主張を吟味するに、その眞精神には寧ろ道德的、義侠的のものがあることを認めねばならぬ。機械工業の勃興し、資本家の横暴を極めて労働者が悲境に沈淪するのを見て、苟くも心情と良心とを有する程のものは、何うしてこれを袖手傍觀することが出來ようぞといつて、敢然、起つて産業組織や社會組織の改造を企て、同胞民生を救はうとするのであれば、少くともその眞精神眞動機はこれを道德的、義侠的のものといふべきである。

社會主義は新しい罪惡觀の上に立つて居る。元來、是迄の刑罰は多くは犯罪者の動機にのみ着眼して、その動機が如何にその環境の影響の下に生じたかといふ點には想到らなかつた。所謂應報主義なるもの即ちこれ

社會主義の美點一

美點二

である。然るところ、輒近、犯罪學が發展して、犯罪の由つて來るところを見るに、これが主なる原因は犯罪者の内界に存することは無論であるが、又その環境即ち社會も亦その責の幾分を負はねばならぬ。刑罰の精神もまた犯罪者のみの懲罰には存しないで、社會全體の改善に存するやうになつて、所謂目的主義なるものが起つた。これを新らしい罪惡觀とする。社會主義が機械工業の招來した同胞民生の苦惱を除去するには、先づ社會を改造せねばならぬとなすところは、全然如上の目的主義に一致するものといふべきである。不良少年、少女の九分迄は、混濁の家庭に孕まれるといふことは、専門家の明言するところであるが、憐むべき犯罪者もまた混濁の社會に孕まれることは、これを察するに難くない。我々は犯罪者を責むると同時に、犯罪者を部分とする社會の改善を圖らねばならぬ。

然れども、社會主義には幾多の缺點の存することを見るのである。此主義は絶對自由、絶對平等の二を以てその眼目として居る。既に絶對である

缺點一

以上は、自由にも平等にも何等の制限の存せぬことが分る。されど、若し絶對自由を許せば、それは必ず社會同胞の自由を蹂躪し、社會の秩序を紊すに相違ない。その己れが救済しようと呼びつゝある社會の秩序を自ら紊すは、小ならぬ矛盾である。絶對平等についても亦同じことがいはれる。若しこれを經濟界に許すとすれば、貧者は富者を嫉んでその富を奪ひ、富豪は一日と雖もその心を安んずる事が出來なくならう。これを政治界に許すとすれば、無權力者は權力者を嫉み、強ひてその權力を奪ふに相違ない。その結果はまた、社會の秩序を紊すことゝなるのである。由つて見れば、社會主義は社會を救済するものでなくて、却て社會を紊亂するものである。彼等のいはゆる社會改造なるものは、徒らにその名のみ美はしくして、その實は社會破壊である。苟くも社會を改造するとあれば、その方法は合理的、平和的、漸進的、而してまた協同的でなければならぬ。これは社會一部の而かも極めて無思慮な少數者に託するには、开は餘りに重大なる任務である。

社會主義の理想は無階級、無特權の社會を作るところに存するのである。凡そ人は物心の統一體であるが、物心何れも不平等である。その物的側面を見れば、大小、強弱があり、その心的側面を見れば、賢愚、徳不徳、種々様々である。是故に假に無階級、無特權の社會が實現せられたとしても、幾ばくもなく、或る意味の差別、或る意味の階級が生じて來るに相違ない。身體が強健であつて精神の優秀な者は、知識も積み得べく、富も蓄へ得るが、これが反對な者は知識も富も得ないで、そこに知識階級、富者階級が成立つからである。一度、この兩種の階級が成立てば、その知識あるものは知識なき者を集めて、その知識を傳達するところに教育が起り、政治の知識ある者がその知識なきものを支配するところに政治が起り、富めるものが貧しき者を使役して生産に従事すれば、産業が起るのである。この教育、政治及び産業の三者は、文化國といふ文化國に缺くまじき個條であつて、いづれも知識と富との階級が基礎をなすのである。然らば無階級、無特權を叫ぶ社會主義は、一國の

文化を破壊するものといはれても、蓋し辯解の言葉がないであらう。

第五節 **マルクス主義**

マルクスの
社會主義史
上の位置

社會主義發展史上の巨人の一人をカール・マルクスとする。彼の唱へた社會主義は近世社會主義と呼ばれて、社會主義の歴史上、一時期を劃するものとせられて居る。彼以前の社會主義は空想主義と呼ばれて、社會問題や經濟問題を取扱ふに、専ら倫理的立脚地よりなし、是等兩問題の裏面には惡政と奴隸制度とが潜むが故に、これを救ふ爲めにはデモクラシーを以てすべきであると論じた。然るところ、マルクスは社會主義の主張を倫理的立脚地から引離して、これを經濟的主張たらしめた。この點は後の社會主義の理論にも亦實行にも、餘程影響するところがあるのである。

マルクスの歴史觀は歴史を一の發展と見做し、それは各時期に於て人民の經濟生活によつて左右せられるものとした。而して彼は、物質的生活の

唯物史觀

生産方法は、生活の社會的、政治的及び精神的道程の一般性を規定する。(經濟學批判序文)といつた。これが彼れの唯物史觀の神髓である。彼は之を古代、中世及び近世の事實に徴して證明して居る。

價值論

マルクスの經濟學の關鍵は價值論にある。彼は價值を使用、價值と交換價值との二に分つた。前者は人の需要を充たす爲に物品を使用するところに生ずる效用であつて、後者はこれが所有者がそれに換へて他の有用品を得るところに生ずる效用である。前者は常に後者を包含するものといはれぬ。何故ぞとあれば、人の生活上有用なもの、中、或るものは人の取るに委せて、必ずしも他と交換することを要しないからである。これ等二種の價值は何れも物品の有する效用であるが、その間に著しい相違が存して、後者は前者の有せぬ要素を有して居る。それは労働である。

剰餘價值

彼は労働を以て資本の唯一の源となすのである。彼によるに資本は節儉、勤勉の賜物ではない。さりとて交換の結果でもない。労働の價值は賃

資本

銀と呼ばれる。而して労働者の生産した貨物は賃銀として支拂つた價值以上の價值を有せしめるのが普通である。即ち貨物の價值から賃銀其他の生産費を引去つた剰餘價值といふのである。資本なるものはこの剰餘價值の積まれたものに外ならぬ。労働者の唯一の所有は労働力といふ商品であつて、これを資本家に賣つて賃銀といふ價值を受取るのである。資本家はこの労働力を使用して剰餘價值を作る。隨て剰餘價值の所

搾取

有は他人の労働力の私有であり、獨占である。換言すれば搾取である。近世となつて資本主義的生産が行はれ、自由契約が勞資兩階級の間に結ばれるやうになつたが、これは一の假面に過ぎない。自由とは空名に過ぎない。事實は強制である。而かも労働者がこれに服従する所以のものは、彼等が飢餓を恐れるからである。實に労働者は強制と飢餓との岐路に立たしめられて居る。マルクスの親友フリードリヒ・エンゲルスはマルクスの剰餘價值論と資本論とに餘程動かされて、社會主義はマルクスの剰餘價值論と

エンゲルス

科學的社會主義

資本論とによつて科學的となつたと賞讃した。科學的社會主義とはマルクス主義の別名である。

必要労働

労働者は己れとその家族とを支へる爲めには、是非六時間の労働を爲さねばならぬ。マルクスはこれを必要労働と呼んで居る。然るところ、労働者は事實その倍の十二時間働くべく餘儀なくせられて居る。然らば、その十二時間の労働は正しく報いられるかといふにさうでない。僅かにその半ばの六時間の労働が報いられるのみであつて、残る六時間のそれは報いられぬ。マルクスはこの報いられぬ労働を不拂労働と呼んで居る。前陳の剰餘價值はこの不拂労働の生むところのものである。されば資本なるものは資本家が労働者からその労働力を搾取するところに成立つものであるとなした。

社會主義

斯様に搾取の可能なる社會は我々人間の住むに値ひせぬものであつて、是非共これが改造を要する。これが方法に二つある。一は政治上のもの

不拂労働

共產主義

「共產黨宣言」

で、他は産業上のものである。前者はデモクラシーの採用であつて、後者は共產主義の實行である。この立場からマルクスは共產主義を主張し、エンゲルスと共に「共產黨宣言」を著した。共產黨宣言は階級闘争による歴史の發展を取扱つて居る。「これ迄の凡ての社會の歴史は階級闘争の歴史である。」自由民と奴隸、貴族と庶民、諸侯と農奴、組合長と被傭者、是等が古代竝に中世に存したところの階級對立である。この對立は更にその歩を進めて階級闘争となつた。近世となり階級の數は減じて、有産者と無産者との二となつた。兩者は互に正面して階級闘争を開始したのである。いはゆる共產黨宣言綱領なるものは、左の十個條である。

- 一 土地所有の禁止、地代の公共目的の爲めの使用。
- 二 重き累進率による所得税の賦課。
- 三 相續權の廢止。
- 四 移民及び叛逆者の財産沒收。

- 五、大資本及び絶對特權を有する國立銀行の設立。
- 六、運輸機關及び交通機關の國有。
- 七、工場及び生産機關の國有、共同計畫の下に荒地の耕作及び土地の改良。

- 八、労働の平等責任、特に農業に關する産業軍隊の設立。
- 九、農工業の聯絡、田舎にも人民を分布して都會及び田舎の區別の廢止。
- 十、兒童の公的教育、幼年工の廢止、教育と産業との聯絡。

これを決行する爲めには敢へて革命をも辭せぬといふのである。こゝでマルクス主義は革命的共產主義となるのである。

マルクス主義を檢するに、たとひ、長所といひ得ぬにしても、少くとも取るべきところが二ヶ條ある。その一はこの主義が貪慾非道の資本家に對する一大警告たる點である。その二は經濟學研究者に、人間の經濟生活の歴史的考察を等閑に附すまじきことを教ふる點である。

長所一

長所二

短所一

マルクス主義の短所に多々ある。蓋し労働はそれ自らでは何等の意味をなさぬ。資本と相俟つて初めて一廉の意味を有し來るのである。資本もまたさうであつて、労働と相俟つてその十全なる意味を有して來る。然るにマルクスは極度に労働の價値を重視する餘り、それが資本と相俟つて初めて意義を有し來るものである事に想ひ到らぬのである。否、敏慧なる彼にしてこれに想ひ到らぬ道理はない。單に論じ到らぬ丈である。

マルクスは労働を以て資本の唯一の源となしたが、これまた偏局した見解といふ外はない。労働は決して徒手空拳で出來るものでない。必ずや原料を要する。大自然の創作に係る原料に加工する人間の活動が即ち労働である。されば我々は資本の他餘の源として、是非共、原料を數へねばならぬ。或は原料の創作者である大自然そのものもまたこれに數へてよいかも知れぬ。この點でマルクスは小ならぬ粗漏に墮して居る。

マルクスは資本は企業家が労働者の労働力を搾取するところに成立つ

といふのであるが、これまた少くとも普汎的には主張し難い議論である。歐洲經濟史を案するに、中世には小工業家、小農業者、小商業家等があつて、何れも小資本を擁してゐた。この小資本は一に彼等の勤勉、節儉の賜物であつた。マルクスは故らに資本は勤勉、節儉の賜物でないと斷じたが、これは少くとも中世の場合では事實に反する。而してこの小資本が産業革命後、産業界の成功者の爲めに兼併せられて所謂大資本となつたのである。勤勉、節儉と搾取とはその間に餘程距離のある概念でなければならぬ。勤勉、節儉の具象化した中世の資本まで、これと正反對なる搾取を以て説かうとするのは、決してその當を得たものではない。この點でマルクスは感情論に墮して居る。

短所四

今日にあつては、彼れの労働の概念を修正せねばならぬ。凡そ労働には精神労働と筋肉労働との二があるからである。固よりどのやうな労働でも多少の精神的要素を有するけれども、筋肉労働の特色は主としてこれが

物質的のもの、機械的のものであるところに存する。或る場合の筋肉労働に至つては、寧ろ機械が主で労働が従たることすらある。精神労働に至つてはさうでない。それは専ら精神を働かせて、肉體は左まで働かさぬのである。學者、教育家、宗教家等の労働(或は勤勞といはうか)は、この種のものである。否、更にこれを考へれば、世間の資本家、企業家の中には徒らに安逸を貪つて、左まで精神を勞せぬ者もあらうけれども、その多くは相當、精神を勞して居る。特に大規模の生産を經營する者に於てさうである。彼は綿密、勤勉、敏活、専心、忍耐、果斷といふやうな卓越した美點の所有者であつて、是等諸美點が働いて初めて大規模の産業を經營し得るのである。この點からいへば、筋肉労働をして成立たしめるものは精神労働であると見なければならぬ。然るにマルクスは筋肉労働を重視するに己が全力を傾けて、これを成立たしむるところの精神労働の價値を認むるに頗る吝かであるのは、小ならぬ不公平の態度といはざるを得ぬ。

以上の諸點より斷じて、私はエンゲルスとは正反對に、マルクス主義は非科學的のものであるといふを躊躇せぬ。凡そ偏見、粗漏、感情論、不公平等は、何れも科學的良心を傷けるものであつて、よしんば、何れかその一を存しても、その見解は之が科學的價值を減するのである。然るに、マルクス主義はこれ等四者を併せ有するのであれば、安んじてこれを非科學的のものとして斷じ得るのである。

第六節 過激主義

過激派の建設した勞農露國の輪廓は、同國の憲法によつてこれを窺知ることが出来る。一九一八年七月十日第五全露サヴェート會議は憲法を議定した。この新國家の國體が全く破天荒のものであることは、露西亞社會主義聯邦サヴェート共和國といふ國號を見てもこれを推知することが出来る。新露國は社會主義の下に勞働者、兵士及び農民の三階級より成る共和

勞農露國の國體

國であつて、貴族、富豪その他あらゆる特權階級の存在は全然認められぬ。また一國の統治權は全露サヴェート會議に存し、この會議の閉會中は全露中央執行委員に存する。勞農憲法第八條に「人ニヨル人ノ搾取ノ廢止」といふ文字が見えるが、過激主義の主なる要素がマルクス主義であることはこれによつて明瞭である。

其第十條に「露西亞共和國ハ露西亞ノ凡テノ勞働者ノ自由及び社會主義的社會ナリ」とある。こゝにマルクスの勞働至上主義が太い線で描かれて居る。斯やうに過激派は何處までも勞働を偏重し、これを以て人生の本義の發現となし、苟も國民たるものは凡て勞働をなすの義務があるとなし、彼の人口に膾炙して居る「働カザル者ハ食フベカラズ」といふ言葉は第十八條に見える。これはマルクス及びエンゲルス合著の共産黨宣言綱領の第八條に見える「勞働の平等責任」といふ主張に外ならぬ。この一般勞働義務制の目的は社會から徒食階級を除去するところにある。こゝに徒食階級と

勞働

は主として資本階級を意味する。更にいへば、國民の凡てを労働化して社會から搾取階級を驅逐しようとするのである。こゝにも我々はマルクス主義に正面させられる。

労働軍隊

過激主義者の労働偏重は、労働軍隊の編成に於てその頂點に達して居る。これは同じく共産黨宣言綱領第八條の「産業軍隊の設置」より來てゐる。ここに於て、これまでの有産階級は全くその武装を解除せられ、これが反對に無産階級が武装して、所謂赤衛軍なるものを編成し、搾取者がその權力を回復する可能性を全然絶つた次第である。これは蓋し資本を社會化する方法として、最も辛辣なるものの一である。

共産主義

過激主義者の非常な努力は、共産主義實行の上に傾倒せられた。勞農憲法第三條は凡て七項から成り、詳細に共産主義的規定を列擧して居る。これを讀んで想起されるのは、共産黨宣言綱領であつて、兩者の間には少からず類似點が発見せられる。もと、露國は重農主義の國であつて、富豪、地主は

教育

勿論、僧侶の中にも廣大な土地を所有する者があり、爲めに小作農が頗る多いのである。その中には自由農民があるけれども、その實、中世に存した農奴の境遇にある者が少くない。隨て國體とか政體とかの變更は左迄彼等の心を刺激せなただけれども、新に共産主義の實行せられて、土地が社會化し、地主階級が消失せて、己れは小作制度から解放せられた事は、彼等の心の奥底から喜んだところである。この點で過激派は巧みに社會下層の人心を收攬した。彼等がその革命に成功した主なる理由はこゝに存する。帝政露國に於ては、教育は主として社會上層の獨占するところとなり、其下層は全く無智、蒙昧の状態にあつたことは既に述べた。露國の總人口の約八割は眼一丁字なき者であるとせられて居る。過激派はこゝに見るところがあつて、思切つて教育を民衆化して無産者の子女の教養にその全力を傾注してゐる。而してその教育は、これまでの資本主義的制度を全廢して労働本位のものとなしたことは、例へば學校に「労働統一學校」といふもの

があり、教師を「學校勞働者」と呼ぶ事實に徴しても知られる。また過激主義者は教育を宗教から引離して、學校に於ては德育即ち宗教を嚴禁し、それにて代へるに「生產業務」を以てして居る。

革命

過激主義の過激なる所以は、過激派の採用した方法を見てこれを知る事が出来る。彼等は革命を以て己が信條となしたのであつて、露國の皇室貴族、富豪等の或る部分がこれが犠牲となつたことは何人も知るところの事である。而して彼等はこの革命といふ方法を國際的に擴充して、世界革命政策を樹立したことは既に述べた通りである。過激派の第二の方法は慘酷なる刑事政策の斷行である。過激主義の過激なる所以はこゝにその絶頂に達するのを見るのである。所謂恐怖政治なるもの即ちこれである。これが機關を全露緊急委員會と稱する。これは帝政時代の祕密警察、憲兵制度及び探偵機關を擴張して、更にこれに武力を與へたものである。一たびこの委員會の睨むところとなれば、何人も忽ちその生命を失ふのである。

刑事政策

短所一

上來述べたところによつて、過激主義の本體はマルクス主義であることが分る。隨て過激主義はこれを分析すると社會主義、共產主義、專制主義、軍國主義等の諸要素を得るのである。專制主義とは無産者獨裁のあたりから、殘忍な刑事政策の斷行のあたりを指し、軍國主義とは勞働者の武装を指すのである。過激主義はこれを國民道德の上から見て、少しも我々の學ぶべきものを有たぬ。過激主義の目的は在來の國家の破壊であるからである。いふ迄もなく、我々は在來の國家に生きつゝあるのであつて、この點から考へて、過激主義は徹頭徹尾我々の同意し得ぬところのものである。思ふに人生の本義は建設であつて破壊ではない。精神的並に物質的の建設が我々の生そのものである。この點で過激主義は人生の本義に遠かるものである。

短所二

過激主義はこれを純理的に考察して、何等新味を有たぬ思想である。何故ぞといふに、過激主義を組立て、居る社會主義も、共產主義も、專制主義、軍

復讐主義

國主義も、何れも以前から存するところのものであるからである。この點はこの主義が研究者をして寧ろ失望させるところである。縦しんば如何に過激であつても、何等かそこに一掬の新味があるならば、思想としてこれが研究者の關心を唆るからである。また過激主義はこれを復讐主義とも見ることが出来る。こゝに復讐とは帝政露國の專制に對する無産階級の復讐の謂である。

されば、この主義は露國では當然、起るべくして起つたものである。我帝國の如きは固より毫も過激主義の起るべき理由を有たぬ。然るに忌まはしき共産黨事件なるものが、前後三回迄も起つて、我が同胞の中に、この帝國を赤化しようとする者の現はれたことは遺憾この上もない。是は我國の理論家もまた實際家も眞劍の考慮を費さねばならぬことゝ信ずる。

第七節 國家的人格主義

共産黨事件

外來思想の
共通點

個人主義

上來論評した諸の外來思想はその主張するところ、それと相異なるけれども、その中に自づと一脈共通の流が見出されるのである。一は個人の生命の安全を熱求すること、他は個人そのものゝ尊重を熱求することである。自由、平等の叫びといひ、階級や特權の呪咀といひ、何れもこれ等二ヶ條に立脚するものである。これ等二ヶ條は、また一の共通の立場に立つて居る。これを個人主義とする。是故に外來思想はその表現の姿相を見れば相當複雑であるが、これを單純化すれば個人主義の熱烈な主張、個人主義の深刻な實行となるのである。隨て外來思想と國民道德との關係は、自然、個人主義と國民道德とのそれとなつて來る。

凡そ個人主義は個人なるものを以て眞の實在となし、これに絶対價値を許し、その生存と發展とを目的とする態度である。人、兎もすれば一概にこの主義を排斥し去るのであるが、それは早計に失する嫌ひがある。何となれば、若しその中心觀念たる個人なるものを純化するといふと、個人主義は

人格主義となるからである。人格主義とは人格を以て眞實にして、社會的に存在するものとなし、特にその知的、道徳的、藝術的及び宗教的活動を重視する立場である。個人主義の排斥すべきは、その個人を孤立的に把握して終に利己主義に墮するところにある。利己主義が我々の實行主義に値ひせぬことは今も猶ほ古の如くである。いふところの危険思想なるもの、中には、この意味に於ける個人主義を極度に押し進めて、少しも個人以外の權威を認めず、權威といへば徹上徹下、己れの所有となし、一人による一人の支配を力説して、個人の要求、而かもその最も不合理なものまでも強ひてこれを充たさうとするものがある。是故に、若し個人主義の病弊を免れようとすれば、何處までもその個人といふ觀念を純化して、それをして社會及び國家の意義と價值とを承認するものたらしめねばならぬ。純化とは本質への復歸である。眞我の開眼である。

然らば、人格とは果して如何なるものであるか。人格はこれが所有者の

思想と行爲とを創作する主體である。茲に創作といつても決して無から有を存在させる謂ではない。潜在の状態にあるものに一定の意義、内容を與へて、それをして、顯在の状態に持來すことである。而して思想と行爲とを除いては、少くとも文化人の自我は存せぬからして、人格は畢竟、文化人の自我を創作するものである。人格は文化人の自我創作の主體である。人格が自我を創作するや、決してこれを心なき機械の營む作用と同一視してはならぬ。無心の機械は外部から動力を與へられて初めてその作用を開始するのであるが、人格に至つては自ら働き出して、自我を創作する。人格にはその創作の理由が己れの内部に存する。機械の作用は所動的であるが、人格のそれは能動的である。人格は己れの内部から能動的に自發的に働き出して自我を創作する。この故に人格は文化人の自我の自發的創作の主體である。

斯様に自發的創作性を備へた人格の所有者が、反省的に國家生活を遂げ

るならば、それがその儘で國家を創作することゝなるのである。人格的生類の反省的な自我創作は、それが國家内に於て營まれ、ば國家創作となるのである。もと、個人以前には國家は存しなかつた。國家は衆個人の創作に係かる偉大なる作品である。幾多の個人が幾多の時の間に幾多の努力を積み、幾多の犠牲を拂つて創作した團體的生活様式の最も重要なものが國家である。人は苟くもその人格を完成しようとするれば、必ず國家を創作して他の人格の所有者と共に茲に共同生活を遂げねばならぬ。人は國家を創作して、その中に生きつゝその有する諸々の善き勢力を受け容れて、初めて己が人格の内容を充實し、その理想を實現することが出来る。人は自ら思想の主體たり、行爲の主體たるより、時としては己が思想も信仰も自ら創作し、自ら蓄積して何等外力の與かるところなしとなすのである。然れども、それは事實に反する。プラトーンは、人はエトスの乳を飲んで育つものである。』といつたが、これは動かすまじき眞理である。此にエ

トスとは風俗、習慣といふほどのものである。各個人の有する精神的資産はその屬する國家から與へられた資料をば、己が思考の方式を以て、これに一定の様式を與へたに過ぎぬ。私が前に創作といつても、決して無から有を存在せしむる意味でないというたのはこれが爲めである。

人はその精神の健全なる限り、善惡を見分け、正邪を辨別する心の働きを有つて居る。名づけて道德的意識といふべきである。この意識は人が社會、國家に屬して、己れ以外に己が人格と等しい人格のあることを認識する所に生ずる。この故に各自の道德的意識は、これを個人の中に存する社會精神(國家精神)であるともいふことが出来る。人にはこの意識があつて、己が要求を制限し、他人のそれを承認し、自他の間に相互關係を生じて、その結果、社會、國家の組織を固うするのである。然るところ、この意識は専ら社會、國家の有する善き勢力を取容れて發展するものであれば、社會、國家とこれに屬する個人の道德的意識とは互に因となり果となるものである。即ち

個人の道德的意識は社會的に、國家的に働いて社會の力となり、國家の生命となるのであるが、この力、この生命が、翻つて個人の道德的意識を陶冶し培養するのである。個人の道德的意識は、その生活の内的指導原理であつて、社會の力、國家の生命はその外的指導原理である。前者にして發展すれば後者もまた隨て發展し、後者にして發展すれば前者もまた自づと發展するのである。以て社會、國家が如何に痛切に個人に作用するかを知るべきである。

されば人がその人格を完成することは、聽て國家を完成することであつて、國家を完成することは、また聽て己が人格を完成することである。人格完成と國家完成とは同じ事實を異つた觀點から見たに過ぎぬ。各人は主觀的には人的個體であり、單獨の存在となつて居るけれども、客觀的には他の人的個體と相合して國家を組立て、國家生活を遂ぐるのである。隨て人の個人的側面と國家的側面とは何づれも同じ個人を異つた觀點から見た

人格完成と
國家完成と個人善と國
家善

に過ぎぬ。固より個人には主我心があつて、或は他人の要求を無視し、或は反國家的行爲に出ることのあるのは事實である。然れども、國家の力と生命とはこの人の主我心を抑へ、この反國家的行爲に抵抗して、能く個人をして國家に適應せしめ、遂には國家の爲めには小なる自我を滅して、永遠に大なる自我に生きる底の犠牲的態度にすら出でしめるのである。

されば個人の行爲が眞に善であれば、それは同時に國家の善である。個人の道德的活動が、眞に己が人格を完成する所以のものであれば、それは同時に國家を完成する所以のものである。否、人は己れの善が同時に國家の善たる底の行爲を遂ぐるものでなければ、決して己れの人格を完成することは出來ぬ。國家は斯様な個人をその構成要素とするのでなければ、決して又自らを完成することは出來ぬ。國家善と一致する個人善を外にして個人善なく、國家完成と一致する個人完成を外にして人格完成はない。されば人が國家の一員として、その位置、境遇に應ずる本分を十分に遂行するこ

とが、極めて重要な道徳的意義を有することが分る。而して己れの善とするところが國家の善となることが、その確實性を加へ來るに随つて、換言すれば、己れの善が普汎性を有するに随つて、その生活の道徳的價值もまた増して來るのである。即ち人の生活の道徳的價值は、その以て善とするものの普汎性を檢して、略、これを知ることが出来るのである。

國家的人格主義

若し上來述べ來つたところに、主義といふ名稱を與へるならば、國家的人格主義といふべきである。國家的人格主義は人格を以て個人に取つて最も本質的のものとなし、その自發的創作性を以て人格の根本的屬性となし、この人格を中心として國家生活をなすべきことを高唱するものである。更にいへば、事實としての個人は事實としての國家に一致するのであることを信じて、個人生活をしてその儘で國家生活たらしめる主張である。人は自我創作の人格的生活により、初めてよくその屬する國家の力と生命とに培ふことが出来る。されば人は何處までも人格的に目覺めて、己が坐す

べき席に着き、己が爲すべきことを爲せば、それは個人的には自我を創作する所以であつて、國家的には國家を創作する所以である。人は斯くして初めて自己獨自の存在を確立することが出来る。國家を背景とする個人の存在は國家のあらん限り滅びぬであらう。人の子に永恆性を與へるものは、單りこの意義に基づく人格中心の生き方である。今日以後の我が國民道徳は、この國家的人格主義に依つて整へらるべきである。

國民道德綱要 終

6
11



□ 有 所 權 作 著 □

不 復
許 製

昭和六年三月二十七日印
昭和六年三月二十三日發行

國民道徳綱要奥附
定價金壹圓八十錢

著 者
發 行 者
印 刷 者

深 作 安 文
辻 本 卯 藏
東京市神田區北神保町十一番地
竹 內 喜 太 郎
東京市牛込區榎町七番地

發 行 所

東京神田
弘 道 館
振替口座東京八一五番

刷 印 社 會 式 株 刷 印 清 日

地 番 七 町 榎 區 込 牛 市 京 東

國民道徳綱要

第二卷 修身道徳 第四篇 國民道徳

一、國民道徳とは、國民として應ずべき道徳的義務を指す。國民道徳は、國家の基礎を成す。國民道徳を養成するは、國家の強さを成す。國民道徳を養成するは、國民の義務である。國民道徳を養成するは、國民の義務である。

二、國民道徳を養成するには、國民道徳を教ふるべきである。國民道徳を教ふるには、國民道徳を教ふるべきである。國民道徳を教ふるには、國民道徳を教ふるべきである。國民道徳を教ふるには、國民道徳を教ふるべきである。

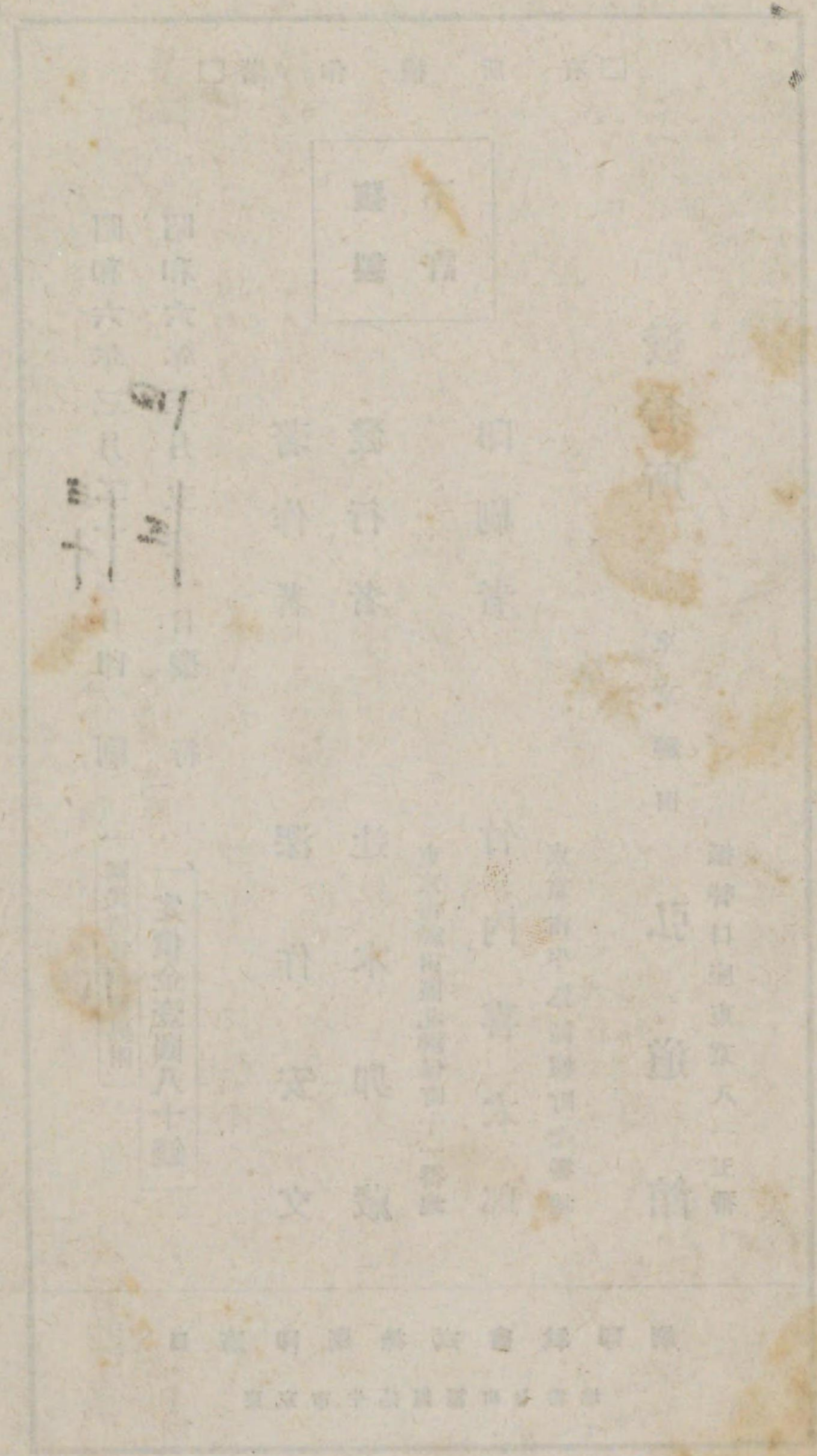
三、國民道徳を養成するには、國民道徳を實踐するべきである。國民道徳を實踐するには、國民道徳を實踐するべきである。國民道徳を實踐するには、國民道徳を實踐するべきである。國民道徳を實踐するには、國民道徳を實踐するべきである。

四、國民道徳を養成するには、國民道徳を研究するべきである。國民道徳を研究するには、國民道徳を研究するべきである。國民道徳を研究するには、國民道徳を研究するべきである。國民道徳を研究するには、國民道徳を研究するべきである。

五、國民道徳を養成するには、國民道徳を宣傳するべきである。國民道徳を宣傳するには、國民道徳を宣傳するべきである。國民道徳を宣傳するには、國民道徳を宣傳するべきである。國民道徳を宣傳するには、國民道徳を宣傳するべきである。

6
11

Handwritten notes at the top of the page.



612
117

